東洋史研究
第七十四巻　第一號　平成二十七年六月發行

「職貢圖」とその世界觀

河上麻由子

はじめに
一　題記の分析
二　使者圖の分析
おわりに

はじめに

「職貢圖」とは、梁武帝（在位五〇二～五四九年）の卽位四〇年を記念して、武帝の第七子蕭繹が作成したものである。梁に至った諸國の使者圖（使者圖）を描き、その國の所在・風俗・中國諸王朝との通交などを記す（題記）。一九六〇年、金維諾氏により、當時南京博物院に所藏されていた「閻立德王會圖」（本稿では「北宋本」とする）が「職貢圖」の寫本であり、しかも北宋熙寧一〇年（一〇七七）に摹寫されたものであることが明らかになった。[1] 金氏の研究を受け、榎一雄氏が「北宋本」使者圖・題記の分析を行い、「職貢圖」に關する研究は一擧に進められた。[2]

榎氏以降、「職貢圖」の研究はやや停滞するが、[3]一九九九年には、深津行徳氏によって「職貢圖」研究の新たな可能性が示された。深津氏は、臺灣故宮博物院所藏の「南唐顧德謙摹梁元帝蕃客入朝圖」（以下「南唐本」）と「唐閻立本王會圖」（以下「傳閻立本本」）を精査、兩本が「職貢圖」を摹寫したものであり、前者の摹寫時期は南唐まで遡りえること、後者の摹寫時期は不明であるが「北宋本」と同系統に屬することを解明した。[4]深津氏により、二本を用いた分析の可能性が開かれたわけである。

「南唐本」と「傳閻立本本」に題記はない。しかも深津氏によれば、「南唐本」使者圖に附された國名は、南宋五代皇帝理宗（在位一二二四～一二六四年）が補ったもので、龜茲國使者圖など國名比定には誤りがあるという。[5]とはいえ、「南唐本」は「北宋本」よりも早く摹寫された寫本で、描かれる使者圖は最も多い。「傳閻立本本」は、鑑藏印は明代までしか遡りえず、[6]摹寫時期は他本より遅いとみてよい。しかし圖像は鮮明で、「北宋本」の往時の姿を推測するのに有益である。兩寫本を分析することで、「職貢圖」が全體として持つ意義を追究することが可能となろう。

前稿では一例として、「北宋本」からは失われた于闐國使者圖を擧げ、「南唐本」「傳閻立本本」の于闐國使が壺狀のものを抱えるのは、天監一八年（五一九）に于闐が瑠璃器を獻上した史實を踏まえていると述べた。[7]于闐國使以外にも、「傳閻立本本」「南唐本」には、何物かを持つ使者圖が見出せる。于闐國使者圖を踏まえれば、これらの物にも何らかの意味が込められているに違いない。

深津氏の研究が使者圖に對する再檢討の可能性を開くものであったのに對し、趙燦鵬氏の研究は、題記に關する新情報を學界に供するものであった。二〇一一年、乾隆四年（一七三九）に「職貢圖」を鑑賞した張庚の拔粹した題記の佚文が、清末成立の『愛日吟廬書畫續錄』中に發見されたことは記憶に新しい（以下、「題記佚文」）。[8]張庚によれば、彼の見た「職貢圖」は白描、紙本であった。[9]この「題記佚文」が、絹本彩色の「北宋本」とは異なる寫本から拔粹されたことは明白である。「北宋本」に殘る題記は一三箇國分に過ぎない。「題記佚文」は「北宋本」にない七箇國分の題記を補うもので、そ

の史料價値は極めて高い。

「題記佚文」の發見を機に研究狀況は一轉し、各國で多くの新稿が發表されている。とはいえ、使者の名稱など、題記にのみ殘る情報の中には十分な檢討が加えられていないものもある。

そこで本稿は、「職貢圖」の題記と使者圖に再檢討を加えることで、「職貢圖」が全體として持つ意義を探るための基礎情報を整理することを試みる。[10]

一　題記の分析

一　題記中の使者名

「職貢圖」題記には、他書にはない使者名が殘される。表は、「北宋本」題記・「題記佚文」にのみ殘る使者の名稱を遣使年に從って列擧したものである。

以下、個々の使者について簡單にみていく。

鄧至國　厲僧崇

天監五年、國王の象舒彭は、厲僧崇を遣わして黃耆四百斤・馬四疋を［獻］上した。（「北宋本」題記、鄧至國條）[11]

鄧至國における厲氏の地位を傳える史料は見出せていない。鄧至國の佛教事情は不明であるが、その名稱から、厲僧崇は佛教を信奉する環境にある人

派遣主體	遣使年	使者名
鄧至國（甘肅から四川省）	天監５年（506）	厲僧崇（「北宋本」題記）
滑國（エフタル）	天監 15 年（516）	蒲多達□（「北宋本」題記）
滑國	普通元年（520）	冨何了了（「北宋本」題記）
滑國王妃	普通元年（520）	康符真（「北宋本」題記）
龜茲國（クチャ）	普通２年（521）	康石憶丘波郎（「北宋本」題記）
白題國（バルフ）	普通３年（522）	安遠隣伽＊（「北宋本」題記） 安遠惱伽（「題記佚文」）
波斯國（ササン朝ペルシャ）	大通２年（528）	安馹越（「北宋本」題記）
渴槃陀（タシュクルガン）	大同元年（535） ＊『梁書』では中大同元年（546）	史蕃匿（「題記佚文」）
武興（仇池）	大同元年（535）	符道安・楊瑍（「題記佚文」）

＊榎氏は「道釋氈獨活使安遠隣伽」を一つの人名とみるが（註２前掲「描かれた倭人の使節 ―― 北京博物館藏『職貢圖卷』――」一七三頁）、本稿では「使」を動詞とみた。

物だったのであろう。

滑國　蒲多達□・冨何了了・康符真

天監十五年、國王の姓は厭帶、名は夷栗陁が、始めて蒲多達□を遣わし、［延］賓□姪名纈杯を［獻上した］。[12]

普通元年、再び冨何了了を遣わし、黄師子・白貂の裘、波斯産の［獅］子錦を獻上した。王の妻である□□もまた使者として康符真を遣わし、同じく物を獻上した。（「北宋本」題記、滑國條）[13]

「北宋本」題記には、

近隣の國と通交するには、近隣の國の胡人に胡書を作成させる。[14]

とある。梁は、滑國の對外交渉が、胡語を使った外交文書の作成という點において、近隣の胡人に頼るものであることを承知していた。

滑國が胡人に期待した役割は、文書の作成には止まらなかった。天監一五年に派遣された使者が、「蒲多達□」なる名前を有することに着目したい。四文字目は上部の殘劃のみで文字の特定は難しい。『梁書』や「題記佚文」にも關聯する史料はない。この人物名について、吉田豐氏から、「蒲多」は Buddha の漢字表記である可能性が大きいこと、その場合、「達□」は dāsa（奴隷）の漢字表記であり、全體としては Buddha-dāsa（ブッダダーサ＝ブッダの奴隷）という名稱になるのではないかとのご教示を頂いた。以下、吉田氏のご教示に從って論を進める。

ブッダダーサは、その名稱から、滑國領域内に居住する佛教徒であったのだろう。また、使者として起用されたからには、長距離移動に必要な能力やネットワークを持っていたはずである。しかし、神龜二年（五一九）に北魏の使者としてエフタルに至った宋雲の記錄によれば、エフタル支配下でもガンダーラなどでは佛教が行われていたものの、エフタル自身は佛教を信奉していなかった。[15] さらにこの時代、長距離交易を主導したソグド人も、ソグド本土においては、基本的には佛教を信奉していなかったと考えられている。[16]

エフタル支配下の佛教徒について、石松日奈子氏は、敦煌莫高窟第二八五窟に滑姓を持つ供養人がおり、これはエフタル支配下のバクトリア人が敦煌に定住したものであろうと述べる。[17] 福島恵氏は、正光中（五二〇～五二五年）にカーピシーから北魏に至り、保定四年（五六四）に死去した李誕が、サンスクリット語からバクトリア語に借用されたダーサ（陁娑）という字を持つことに注目、その出身地からみても李誕はバクトリア人に推定できるとした。李誕はソグド人安氏を妻にしており、ソグド人と聯携しながら交易に携わった人物であるという。[18] とすれば、天監一五年に派遣されたブッダダーサは、滑國支配下にあって佛教を信奉するバクトリア商人だった可能性がある。[19]

またこの時代、ソグド人以外で康姓を持つものは想定し難く、[20] 滑國王妃が普通元年に派遣した康符真はソグド人であったとみてよかろう。[21] 普通元年に派遣された冨可了了は不明であるが、上述したことから判断して、滑國の對梁交渉に領域内の諸胡（そこにはバクトリア人やソグド人が含まれただろう）が參與したことは動かない。

龜茲國　康石憶丘波郁

白題國　安遠隣（惱）伽

波斯國　安馹越

渴槃陀　史蕃匿

普通二年、使者として康石憶丘波郁を遣わし、表を奉って入朝した。（「北宋本」題記、龜茲國條）[22]

普通三年、白題の道釋檀獨活が、安遠隣伽（「題記佚文」では安遠惱伽）を遣わし、京師に至り貢物を［獻］じた。（「北宋本」題記、白題國條）[23]

大通二年に中［使］として安馹越を遣わし、表を奉って佛牙を獻上した。（「北宋本」題記、波斯國條）[24]

大同元年、使者として史蕃匿を遣わし、表を奉って貢物を獻上した。[25]（「題記佚文」、渴槃陀條）

以上の使者はまとめて考察を加える。

波斯が派遣した安馹越は舊稿で取り上げた。その概要を述べておく。『廣弘明集』巻一九には、中大通五年（五三三）、武帝による摩訶般若波羅蜜經の御講の參加者として波斯國使主の安拘越が擧げられている。[26]「安拘越」と「安馹越」とは、ともに「越」を名に含むのみならず、近接した時期に使者として對梁交渉に携わっていることから無關係であったとは考え難い。五二〇年代後半から五三〇年代前半における波斯の對梁交渉は、佛教と關聯していたのみならず、安氏を名乗る人物に主導されていた。[27]

南北朝時代以降、長距離移動を行い對外交渉にも關與した安氏といえば、まず想起されるのはソグド人である。

魏末（五三一～五三三年頃か）、北魏は安吐根を蠕蠕に派遣した。遣使を受けた蠕蠕側は吐根を一時的に抑留するが、後に東魏への使者として起用する。大統一一年（五四五）にも、北魏は安諾槃陁を突厥への使者として派遣していた。兩者はソグド人であることが明らかにされており、安姓をもつソグド人は、六世紀中葉には北朝―諸國間交渉に介在していた。[28]

右に加え、五世紀末に高車が北魏に派遣したソグド人越者（ワルチェ）、[29]六世紀に突厥の使者として東ローマに至ったソグド人マニアクやその息子、[30]五五二～五五四年に柔然の使者として北齊に至った虞弘、[31]六世紀後半以降、トルファン文書にみえる遊牧諸集團が派遣した多くのソグド人の存在などを踏まえるに、[32]波斯による對梁交渉を主導した安氏は、東西アジアの交通・交易に介在したソグド人であったというべきであろう。[33]

題記が言及する使者の中で、ソグド姓（昭武九姓）を持つのは、[34]安馹越・康符真・康石憶上波郝・安遠隣（惱）伽・史蕃匿の五人である。[35]ソグド語に由來すると判斷できる人名はない。史姓は漢人や塞北諸族にもみられる。[36]とはいえ、梁までの長距離移動が可能で、國家間交渉に關わるノウハウ・人脈を持ち、渴槃陀（「南唐本」では渴盤陀、「傳閻立本本」では隔槃陀）が使者として起用できた史蕃匿は、漢人や塞北諸族であるよりは、ソグド人である蓋然性が高い。この時代の康姓については、先述したように、ソグド人以外は想定し難いという。波斯國使安氏の例を考えれば、白題國の使者安遠隣（惱）伽についてもソグド人であった可能性が排除できない。

表1によれば、ソグド姓を持つ使者の派遣は五二〇～三〇年代に集中している。西アジア・中央アジアの大部分がエフタルとその友好國の領域となり、そこにおける移動が容易になって「エフタルの平和」がもたらされる一方[37]、そこにはエフタルによる統制が敷かれ、ソグド諸國から中國への朝貢は五〇九～五六四年まで途絶する[38]。殘された題記は全體の三分の一にも滿たず、ここから大勢を窺うことは困難であるものの、「エフタルの平和」の下にあるソグド人が、安定した治世を迎えた梁との交易の機會を求め、各地の王權に働きかけて使者になったという狀況を想定することも、あながち不可能ではあるまい[39]。

武興　符道安・楊瑒

大同元年、使者として符道安・楊瑒等を遣わし、啓を送り國土を（梁に）奉還したいと願い出た（「題記佚文」、武興蕃條）[40]。

武興の大姓に苻氏が擧げられること[41]、「符」は「苻」と混用されることから[42]、道安の姓は正しくは「苻」であろう。武興の苻氏について、遣使に近い時代では、北魏に降った武興王楊集始に反亂を起こした苻幼孫が知られる[43]。一方、武興の支配者は楊氏である。他書には現れないが、楊瑒は、武興の支配者一族に聯なる人物なのであろう。楊集始以降、武興の楊氏は南朝の冊封を受けつつも、北魏に使者を盛んに派遣していた[44]。遣使前年における北魏の東西分裂をうけ、武興は、苻氏と楊氏とを使者として派遣することで、外交方針の轉換を强調したのであろう。

本節の檢討結果をまとめておく。武興は、支配階級に屬する人物を派遣することで、梁との臣屬關係を改めてとり結ぼうとした。鄧至國の使者と滑國の使者（ブッダダーサ）は、その名前から佛教を信奉する環境にあったのだろう。佛教を偏重する梁の宗教事情に配慮したものと思われる[45]。

加えて、滑國・波斯國・龜茲國・白題國が、ソグド人やバクトリア人を使者として起用した可能性があるとも指摘した。このことは、「職貢圖」の使者圖、中でも滑國使者圖を考える上で留意すべき意味を持つ。

榎氏が、エフタルをイラン系と推定したことは著名である。ところが「職貢圖」滑國使者圖の容貌はモンゴロイドに近い。そこで榎氏は、西域からの使者は必ずしもその國人とは限らず、その國王から國使としての權利を購入した他國の商人であることも珍しくないとして、使者圖の容貌がモンゴロイドに近いことを説明しようと試みた。[46]

本節で述べたように、滑國は近隣の胡人を使者として梁に派遣していた。加えて、「北宋本」題記が、本國人とは別に、[47]

その使者は、切った髪を亂れたままにし、波斯錦の褶・黄色い錦の袴・朱色に染めた麋皮の長靴を身に着けていた。

（「北宋本」題記、滑國條）[48]

と、使者の服飾にも言及するからには、滑國使者圖は、本國人ではなく、使者として梁に至った人物（恐らくはソグド人やバクトリア人）の様子を描くはずである。[49]

榎氏のいうように、前近代においては、本國人以外の人物――情報收集や長距離移動に長けた商人など――を使者として起用することは多くあった。梁―西アジア・中央アジア諸國間でも同様の狀況があったことは、本節で述べてきたとおりである。「職貢圖」使者圖の身體的特徴は、使者が本國人であり、かつ使者を寫實的に描いたと斷定できる場合を除き、派遣主體である國の民族を考察する手掛かりとはなりえない。

二　使者の持ち物

はじめにで述べたように、于闐國使者圖が壺狀の物を抱えるのは、同國が天監一八年に瑠璃器を獻上したことを踏まえている。「傳閻立本本」が器を青く塗るのは、瑠璃を表現するものであろう。

于闐國使者圖のように何物かを持たされた使者圖は他にも見出せる。例えば、「傳閻立本本」・「北宋本」周古柯國（カルカリック）の使者圖は、左手に何物かを持ち右腕をその下にまわす。

「南唐本」周古柯國使者圖のみは、他二寫本と髪型・ポーズなどが大きく異なる。深津氏が明らかにしたように、「南唐

本」使者圖に附された國名には誤りがあり、今は「傳閻立本本」と「北宋本」を分析の對象とする。

于闐國使者圖の例を踏まえると、周古柯國使者圖の持つ物はその獻上品であることが豫想される。そこで周古柯國の題記をみるに、

表にいうことには、「一切の恭敬する所であり、一切吉が具足し、天の靜かで雲が無く、滿月が明るく輝いているかのように、天子の身も清靜で、（一切吉が）具足していらっしゃいます。（武帝は、）四海のために弘願を起こし、（衆生を救う法）船となっていらっしゃいます。（梁は）揚州（に都する）閻浮提中第一の廣大國であり、人［民］は（國土に）滿ち、（人々は）喜び樂しみ（國土は）莊嚴であり、（その樣は）天上と異なりません。周古柯王（である私）は、頭を地につけて禮拜し、天子に（その安穩）をお尋ねし［……念……。私は］今金［椀］一・琉璃椀一・馬一疋を獻上いたします」。（「北宋本」題記、周古柯國條）[50]

とあり、金製の椀、琉璃製の椀、馬各一を獻上したことが知られる。

「北宋本」周古柯國使者圖の持ち物は椀に近い。しかしかなり黑ずんでおり、本來の彩色は窺えない。「傳閻立本本」使者圖の持ち物は椀に似ないが、彩色は金製品を意圖するようである。表文の內容を考慮するに、周古柯國使者圖は金椀を持つ姿を描くのであろう。

使者の持ち物が最も多く殘るのは「南唐本」である。中でも特徵的なのが「滑國使者圖」である。「南唐本」の「滑國

圖１　于闐國使者圖　傳閻立本本（右）
南唐本（左）

使者圖」は、盆の上に盃らしきものを捧げ持つ。ところが、「南唐本」の「滑國使者圖」と「北宋本」滑國使者圖（第二章第一節に後掲）とは全く異なる。「南唐本」の「滑國使者圖」と「北宋本」滑國使者圖は、同一使者圖の摹寫ではありえない。恐らく、「南唐本」の國名比定に誤りがあるのであろう。

他の二寫本には、「南唐本」の「滑國使者圖」のように、盆の上に背の低い盃らしきものを捧げ持つ使者圖はない。そこで、「南唐本」の「滑國使者圖」も獻上品を捧げる姿を描くと假定し、史書に器類を獻上したとある國を搜索すると、『攻媿集』卷七五「跋傅欽甫所藏職貢圖」にひかれた河南（吐谷渾）の題記、「北宋本」題記中の呵跋檀國（カバディアン）と胡蜜丹國（ワハーン）の書・表に、該當する獻上品を見出せる。

河南の題記

梁の天監元年、使者を遣わして朝貢し、瑪瑙の鍾を獻上した。（「跋傅欽甫所藏職貢圖」）[51]

呵跋檀國の書

その（書に）いうことには、「（武帝）は最も恭敬［すべき］吉天子であり、東方大地に（私）呵跋檀王は、一度［ならず］百千［萬］億（回）も、天子の安［穩］をお尋ねいたします。[52]

圖２　周古柯國使者圖　傳閻立本本（左）南唐本（中央）北宋本（右）

私は今使者を遣わして手ずからこの書をお送りいたします。書（に述べることが）嘘ではない（と示す）ため、馬一疋・銀器一故を獻上いたします」。（「北宋本」題記、呵跋檀國條）[53]

胡蜜丹國の表

その表にいうことには、「［揚］州（にいます）天子は、［日］出處にある大國の聖主であり、（私）胡［蜜］王の名は［時］僕は、遙か遠く兩膝を地につけて合掌し、千萬（回）も拜禮いたします。今滑國の使者が聖國に至ることとなり、そこで函啓、竝びに水精の鍾一口・馬一疋を附しました。聖主が勅を下すことがあれば、敢えて違うことはいたしません」。（「北宋本」題記、胡蜜丹國條）[54]

河南が天監元年（五〇二）に瑪瑙の鍾、呵跋檀國が普通元年に銀器、胡蜜丹國が同年に水精の鍾を獻上したことを確認したうえで注目したいのが、「北宋本」胡蜜丹國使者圖は、右手を胸の所にあげ二本の指を突き出していることである。「傳閻立本本」でも、右手の先は不明瞭であるが、使者圖は同様のポーズをとるようである。

「南唐本」の「滑國使者圖」と、「北宋本」「傳閻立本本」の胡蜜（密）丹國使者圖（「傳閻立本本」では「胡密丹國」、本稿では「胡蜜丹

圖３　胡蜜丹國使者圖　傳閻立本本（左）北宋本（中央）南唐本滑國使者圖（右）

國」で統一する）を比較すると、容貌、左手を腹部にまわす點、持ち上げた右手の高さは近似するが、頭髪や髭の様子は三寫本で異なる。また、「南唐本」滑國使がカフタンの襟を留めるのに對し、「北宋本」「傳閻立本本」の胡蜜丹國使はカフタンの襟を開ける。このような差異があるにもかかわらず、「北宋本」「傳閻立本本」の胡蜜丹國使者圖がとる奇妙なポーズを理解するには、「南唐本」の「滑國使者圖」が胡蜜丹國使者圖の誤りであり、「北宋本」「傳閻立本本」の祖本に描かれていた胡蜜丹國使者圖の獻上品（盆・盃）は轉寫における何れかの段階で省略、行き場を失った右手は不自然なまま殘されたと假定するのが有效である。

本節では、周古柯國使者圖・胡蜜丹國使者圖（「南唐本」では「滑國使」と題される）が、于闐國使者圖と同じく、題記にある朝貢品を捧げ持つことを指摘した。しかし入朝時、瑠璃器や金椀、水精の鍾といった品を、使者圖のように使者がむき出しのまま捧げ持つ場面があったとは考え難い。于闐國使者圖を含めてこれらの使者圖が獻上品を捧げ持つのは、作成者がそのようなイメージ化を施したからにほかなるまい。

使者圖とイメージ化（使者がむき出しの獻上品を捧げ持つといった工夫を使者圖に書き加えること、及び、文獻・造形作品・傳聞などに基づき使者圖を描くことを、本稿では使者圖の「イメージ化」と稱する）について、最も多く議論されてきたのが倭國使者圖である。倭國が梁に朝貢したという記錄はなく、倭國使者圖は、『三國志』卷三〇、魏書、烏丸鮮卑東夷傳、倭人條（以下、『三國志』倭人條と略記）の記述に基づき想像で描かれたとする說と、[55]實際に南朝に至った倭國人――ただし使者ではない――を描いたとする說があった。[56]現在は前者が大勢を占める。

前者の說をとる先行研究中でも、坂元義種氏は、使者圖には、蕭繹や「職貢圖」作成の助力者が實見したもの、または國家間交涉とは無緣な外國人を描いたものも含まれるであろうが、倭國使者圖を含め、文獻・傳聞等の知識で想像上の外國使節を描き上げたものがその大部分を占めると想定した。[57]極めて重要な指摘であるが、ただし最近の研究を踏まえるに、使者圖の內實はより多樣である。

そこで次章では、いくつかの使者圖を取り上げ、「職貢圖」が何を描くのかを整理する手掛かりとしたい。

二　使者圖の分析

一　使者圖とイメージ化

本章ではイメージ化という視點から使者圖の再檢討を行う。まずは、先行研究がリアリティを追究したと推定する事例を紹介する。

虜國使者圖

「傳閻立本本」「南唐本」の冒頭には、廣袖の衣服を身に着け、左右に人を從えた使者が描かれる。同じ構圖をとる使者圖は他になく、兩本が同一使者圖を摹寫したこと、中央の人物が梁にとって他國の使者よりも重要であったことがわかる。

深津氏は、「傳閻立本本」の中央の人物が獸尾を飾る冠を頂くことに着目し、「南唐本」の該當部分に認められる薄い汚れも本來は同樣の冠飾を描くと推定、これとよく似た冠飾が北魏・北齊の將軍クラスの墓の線刻に見られることを指摘した上で、中央の人物は「虜國」、すなわち北魏の人物を描くのであろうと論じた。(58)

圖４　虜國使者圖　傳閻立本本（左）南唐本（右）

「職貢圖」全體の配列順序を特定する術は今のところない。しかし、虜國がその筆頭であったことは疑いない。[59] 梁における對北朝交渉の重要性を考えれば、「南唐本」「傳閻立本本」冒頭に置かれた使者圖を北朝の人物とする深津氏の說は妥當である。

使者圖の服飾に、より詳細な檢討を加えたのが堀內淳一氏である。「傳閻立本本」では、虜國使者圖の中央・左の人物は朱色の衣服を、右の人物は白色の衣服を着て布で髮を束ねている。氏によれば、朱色の衣服は南北朝で交換される使者の常服、貂尾を飾る武冠は侍中・常侍の正裝で、白色の衣服を着用し髮を布で束ねるのは儒者の服裝であるという。北朝が梁に三人からなる使者を派遣したのは、天平四年（五三七）、東魏が散騎常侍李諧・吏部郎中盧元明・通直散騎常侍李鄴を派遣した時のみである。[60] 三人目に擧がる李鄴は儒學に通じた人物で、梁滯在中、梁武帝やその近臣と儒學について議論を交わしている。[61] 以上から堀內氏は、虜國使者圖は天平四年の東魏の使者を、リアリティを重視して描くと結論附けた。[62]

虜國使者圖のリアリティについては後述するとして、使者圖のモデルを特定した點で氏の研究は重要である。また氏により、「傳閻立本本」虜國使者圖は當初の色彩を留めることが論證された。

高句麗使者圖

高句麗（「職貢圖」關聯史料における高句麗の國名表記は諸本で異なるが、本稿では便宜上「高句麗」で統一した）の題記は『翰苑』と「題記佚文」に殘される。ここでは「題記佚文」を引く。

圖5　高句麗使者圖　傳閻立本本（左）南唐本（右）

婦人は白、男子は袺錦を身に着け、金銀を用いて飾りとする。貴人は幘をかぶるが［後ろ］は無く、金銀で鹿耳・羽を造り、これを幘の上に加える。卑賤の者は折風をかぶるが、その形は古の弁のようである。耳を金環で穿つ。上に着る衣を表といい、下に着る衣を長袴という。腰には銀の帯を用いる。[63]（「題記佚文」、高句麗條）

高句麗使者圖は「傳閻立本本」と「南唐本」に殘る。「南唐本」の反り返ったポーズ、つま先が高く反る靴などに相違點はあるが、兩者が同じ使者圖を摹寫することは間違いない。

使者圖は袷（「傳閻立本本」では赤地にハート型の文様をあしらう）の上衣と袴（「傳閻立本本」では青く彩色され、裾に赤い縁取りがある）、幅廣の帶を身に着ける。

「題記佚文」は男性の衣服を「袺錦」とする。他方、『翰苑』引用の題記には「結錦」とあり、湯淺幸孫氏は「結」を「紅」と意解する。[64] しかし、「題記佚文」には「袺」、『翰苑』には「結」と、異なる系統の史料で「吉」を旁とする文字が用いられることはやはり重要であろう。『翰苑』所引の「高麗記」に「その民はまた錦を造り、紫地に襭文を施したものを上とする」[65]とあることを參照するに、「袺」「結」は「襭」の誤寫であるのかもしれない。

使者圖で最も重視されてきたのが、幘に羽をあしらうことである。羽を加えた幘は、この前後の時期の壁畫にも描かれており、[66] よって使者圖は、當時の觀察に基づく肖像と推定されてきた。[67] なお「題記佚文」は、鹿耳の飾りも幘に加えるとする。「傳閻立本本」では鹿耳らしき飾りが羽の前に加えられており（「南唐本」では省略）、その彩色は金製を示している。

滑國使者圖

滑國と題する使者圖は「北宋本」と「南唐本」に殘る。しかし、「南唐本」の「滑國使者圖」が、胡蜜丹國使者圖を摹寫したもの

圖6　滑國使者圖　北宋本

であることは先述した。

「北宋本」滑國使者圖は、前掲した題記の記述に相應しく、膝下に至る立襟のカフタンの腰にベルトを回し、長靴を履く。色彩は題記と一致しない。カフタンの襟・衽・袖口・裾は異なる布で縁取りされる。襟は左右に開き、右襟には襟元を留めるためのボタンが不鮮明ながらも認められる。髪は結わず、冠や布で覆うこともない。

滑國使者圖のように、筒袖で膝下に至る立襟のカフタンを着て、その襟を開く使者圖は、「北宋本」では、呵跋檀國・白題國（左右の襟を開き、右襟元にボタンをあしらう）波斯國・胡蜜丹國（左右の襟を開く）がある。

「傳閻立本本」では、胡蜜丹國・陽槃陀・武興・于闐國（左右の襟を開く）、白題國・呵跋檀國（左右の襟を開き、右襟元にボタンをあしらう）、宕昌國（喉元で襟は閉じられるが開いた右襟も描かれる。右襟にボタンをあしらう）、波斯國（赤地に白圓のある布が襟元から裾へと續くことから、襟元は閉じられているようにみえるが、左右に開かれた襟も描かれる）の使者圖が該當する。

「南唐本」では、渴盤陀・武興（左右の襟を開く）宕昌國（左右の襟を開き、右襟元にボタンをあしらう）芮芮國・河南・周古柯國・于闐國（喉元で襟は閉じられるが、開いた右襟も描かれる。右襟元にボタンがある）龜茲國・呵跋檀國・胡蜜丹國（喉元で襟は閉じられるが、開いた左右の襟も描かれる。左右の襟元にボタンをあしらう）の使者圖がそれにあたる。

カフタンの襟（特に右襟）を開けて身に着けるというのは、エフタルに始まりその周邊に廣まった流行として知られる。エフタルで用いられた表象（三つの三日月をあしらう冠など）とともに、領域内や周邊の諸國――ソグド諸國を含めて――に受容されたことが明らかになっている。[68]「職貢圖」の使者圖は、實際の使者に卽して描いたものであるのか、摹寫の過程でどれほど原圖を留めているのかという問題もあるが、エフタルの平和の下、その影響を受けたであろう西アジア・中央アジア諸國を中心に、諸國の使者が、ソグド人を使者として起用した國も含めてカフタンの襟を開けた姿で描かれるのは、ある程度はリアリティ――この場合のリアリティは、作成者や見る者にとってのものかもしれないが――を追究した結果であろう。

題記によれば、滑國の使者は波斯錦を身に着けていたという。殘念ながら「北宋本」では、どの使者圖にも衣服の文様は描かれない。ただし、「傳閻立本本」のカフタンや襟元の開かないチュニック型カフタンには、西域産の錦（波斯錦か）を表現したらしいものがある。波斯國使者圖のカフタンは、赤地に白い圓文のある布で縁取りされる。胡蜜丹國使者圖のカフタンは赤地に白い圓文があり、縁取り布は黒地に白の圓文がある。白い圓文の内部はそれぞれ、縁を殘して黒と赤に塗られている。周古柯國使者圖のカフタンでは、聯珠紋に圍まれた青い圓文のある黒布が縁取りに使われる。これらの圓文には、于闐國使者圖のカフタンで白い圓文の中に赤で七瓣の花が描かれる如く、様々な文様が描かれていたに違いない。「南唐本」の「滑國使者圖」（實際は胡蜜丹國使者圖）のカフタンには、上下左右の小圓文で聯結される圓文が、于闐使者圖のカフタンには、上下左右の小圓文で聯結される菱形文（内部には花）が描かれる。また河南使者圖でも、内部に文様のある圓文がカフタンに描かれる。[69] 滑國使者圖には、本來これらに類する文様が描かれていたと考える。[70]

兩本はともに後代の寫本であり、どの程度原圖の圖案を正確に傳えているのかは全く分からない。ただし、使者圖作成者の關心が、衣服の文様にまで及んでいたことは推測されてよく、また滑國の題記から判斷して、波斯錦を身に着ける姿で描かれた使者圖があったことは疑いない。西域産の錦と推定できるカフタンを身に着けるのは、ササン朝とエフタル、及びその領域内諸國（于闐國・胡蜜丹國・周古柯國・呵跋檀國）や通交國（河南）の使者である。もしも上記使者圖のカフタンの文様が原圖をいささかでも反映しているとすれば、それは、「職貢圖」の作成者やそれを見る者にとってのリアリティを表現したものであったと解してよかろう。

虜國使者圖・高句麗使者圖・滑國使者圖について、先行研究に導かれながら寫實性の痕跡を整理してきた。しかし、全ての使者圖で同様の努力が拂われたわけではない。中天竺使者圖や北天竺使者圖には、佛典や造形作品によるイメージ化が推定できる。

中天竺使者圖

坂元氏は、中天竺は天監二年（五〇三）、北天竺は天監三年（五〇四）以外の遣使が傳わらず、これ以降に兩國の遣使が無かったとすれば、天監七年（五〇八）に誕生した蕭繹が兩國の使者を實見したはずはないとして、使者圖が實際の使者を描いたかは疑問であるとする。[71]

「職貢圖」は、裴子野の「方國使圖」を先蹤とする。[72]そのため、兩天竺の使者圖が「方國使圖」に載錄されていなかったことを論證しない限り、蕭繹の實見の有無は兩使者圖の性格を判斷する材料にはならない。とはいえ以下に述べる理由から、筆者も兩使者圖が實際の使者を描いたものではないという坂元氏の說に贊同する。

中天竺使者圖は「南唐本」と「傳閻立本本」に殘される。「北宋本」題記・「題記佚文」に關聯史料はなく、『梁書』・『南史』にも服飾に關する記述はない。

中天竺使者圖は、どちらの寫本でも上半身は裸で下半身には膝に達しない腰布（「傳閻立本本」では赤）を卷く。髭は無く、「傳閻立本本」では眉間に白い小圓が描かれる。腰に卷きつけられた帶狀の布である條帛（「傳閻立本本」では左右は青、中央は赤の三色に塗り分けられる）は兩足の間を通って前面から背面と回されており、最終的には右上腕部に掛けられている。使者の拜むような手つき、右足を少し前に出し、左足を後ろに引くポーズも兩寫本に共通する。身に附けた寶飾品の詳細に差異はあるが、全體として「南唐本」と「傳閻立本本」の中天竺使者圖は一致している。

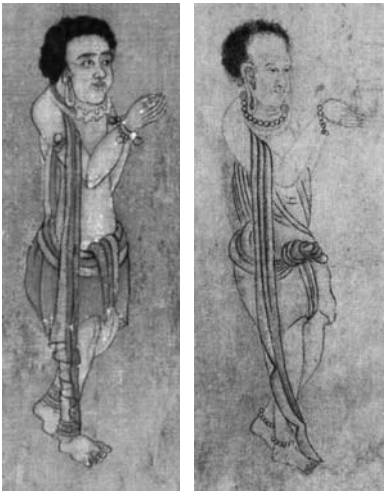

圖７　中天竺使者圖　傳閻立本本（左）
南唐本（右）

中天竺とは、中國佛敎徒の間で行われた、天竺を東西南北と中央の五つに區分する概念の一つで、およそ、マトゥーラを含むその東側を指す。[73] 梁へ使者が派遣された時代、中天竺地方、特にその中心であるマガダ地方はグプタ朝の勢力範圍内にあった。[74]

天監二年、中天竺王は使者を派遣して表文を奉った。[75] しかし上表文が王名を「屈多」とするのは、固有の王名ではなく王朝名である「グプタ」の音に漢字を當てはめたものであり、[76] 中天竺上表文の作成にグプタ朝の王が直接には關與していなかったことを示唆する。[77] グプタ朝の國域を國名に冠し、王名を「屈多」としていることから、中天竺上表文がグプタ朝の使者と主張することは明らかであるが、實際にこの時の王や、グプタ朝關係者が上表文の作成に關與していたかは極めて疑わしい。[78] よって中天竺使者圖は、グプタ朝から正式に派遣された使者を描いたものではないと考えられる。

中天竺使者圖が描かれた背景には、インドの影響を受けた、乃至インドから將來された造形作品の存在を想定したい。四川省萬佛寺址で發見された梁代の菩薩立像には、インド的特徵が認められるという。[79] また土居淑子氏は、インド系僧侶が梁で畫事に携わっていたことから、グプタ朝最盛期の畫法が梁に傳えられたと推測する。[80] 梁の朝野で佛敎が熱狂的に尊崇されたことを思えば、中天竺使者圖の作成者もまた、インドから將來された佛敎に關わる造形作品や、インド出身僧による繪畫、その影響を受けた造形作品に觸れる機會は豐富にあっただろう。

北天竺使者圖

北天竺使者圖も上半身は裸である。「傳閻立本本」の使者圖

圖 8　北天竺使者圖　傳閻立本本（左）
南唐本（右）

は膝丈の赤い袴狀の衣服（あるいは腰布を兩足の間に通すか）を着用する。「南唐本」の使者圖は膝丈の腰布を卷く。條帛は、腹部を中心に前面から背面へと複雑にまわされ、左右の肘あたりに卷きつけられる。「傳閻立本」では、條帛は白く彩色され、兩端がどのように處理されているのかは分からない。「南唐本」では、條帛の一方は前面中央で結び目が造られた後、左腕から前方に長く垂らされている。もう一方は右肩に掛けられるようにみえるが、その先端がどのように處理されるのかは不明である。やや腰を右に振るポーズは共通するが、「傳閻立本本」が條帛を掴んだ兩手を腹部の上に置くのに對し、「南唐本」は條帛を掴んだ右手を側面に垂らして左手は肘を曲げて條帛をつまむ。裝飾品に差異があることは中天竺使者圖と同樣である。

北天竺とは、中天竺と同樣に地域を指す概念で、ヒンドゥークシュ以南の西北インド一帶を指す。[81] 天監三年に方物を獻上して以降、[82] 北天竺が梁に使者を派遣した記錄はない。

法顯に從い、マトゥーラ以南を中天竺とするならば、[83] 北天竺と呼ばれる地域の氣候は南北で大きく異なることとなる。よって當時の人々が着用した衣服も南北で異なっていたはずである。

やや遡って、クシャン朝からササノクシャン朝時代のガンダーラでは、クシャン族は公式な場では筒袖の上着とズボン、ブーツを着用していた。[84] ただし五世紀に北天竺地域を通過した法顯は、烏萇（ウジャーナ）の衣服が中天竺と同じであると記す。[85]

遣使のあった時代には、北天竺地域はエフタルの支配下にあった。[86] エフタルの服飾には不明な點が多いものの、先述したように、立襟・筒袖のカフタンの右襟を折り返して身に着けていたとされ、しかもその服飾は領域内外の諸國に廣く受容されていた。[87]

時代は下って、唐代入竺僧の記錄をみるに、玄奘は、北印度は寒さが嚴しく「胡服」を身に着けるとする。[88] 義淨は、カシュミール以北では突厥やソグドと同じ衣服を用いるといい、[89] 慧超は北天竺のうち闍蘭達羅（ジャーランダラ）・迦葉彌羅

國（カシュミール）の王・豪族などについて中天竺と同じ衣服を用いるとし、それ以外については綿や毛織の上着とズボンを身に着けるとする。[90] ただし現地のサンスクリット文獻から、カシュミールでも、上下に分かれた、ほぼ全身を覆う衣服が用いられたことが分かっている。[91]

上に述べてきたことを勘案するに、北天竺地域の北部では、六世紀初頭にも、多くの地域でカフタンとズボンからなる衣服が着用されていた蓋然性が高い。

他方、北天竺地域の南部では、その氣候から、中天竺と同じ衣服が用いられていたであろう。これらの地域から梁に使者を派遣するには、北天竺北部を通過して陸路を取るか、海路を取ることとなる。とはいえ、エフタルのトラマーナ王がインド中部にまで侵入して後、[92] グプタ朝の支配が後退する中で、陸路にしても海路にしても、北天竺地域南部の集團が梁に使者を派遣する必要性があり、しかもそれが政治的・經濟的に可能であったかは疑問である。

このようにみてくると、北天竺使者圖についても、イメージ化を想定する餘地が浮上しよう。使者がまとう條帛の複雑な様子は、インド將來の、乃至インドの影響を受けた造形作品の存在を背後に感じさせるように思う。經典や造形作品を通じて天竺を知る人々にとっては、北天竺地域における氣候の差異は問題にはならず、中天竺使者圖と同様に、上半身を露わにして條帛を身に着けるのがあるべき姿であっただろう。

兩國の遣使の眞僞はおくとしても、その遣使は各一度しか傳わらず、天竺と梁との交渉が極めて稀薄であったことは間違いない。その一方で、梁では朝野を擧げて佛教を信奉しており、釋迦誕生の地天竺への關心はことさら高かった。そういった實際と關心の反比例が、使者圖に對するイメージ化を強めたと考える。

倭國使者圖

以上を踏まえて、倭國使者圖について再檢討を加える。

題記には、

木綿を頭にまき、横廣（の布）を身に着けるが、縫うことはなく、ただ結んで［連ねるのみである］（「北宋本」題記、倭國條[93]）。

とある。周知のように右は、『三國志』倭人條[94]の記述と酷似する。[95]倭國使者圖は布を横にし、肩を覆って胸の前で結び、腰には布を巻く。「傳閻立本本」では、上下とも、赤い縁取り文様のある青い圓文を散らした白地の布が用いられるが、「北宋本」では茶褐色の布で肩を覆い、白い布を腰に巻く。帶（「傳閻立本本」では赤）は腹部前面で結ばれる。首・腕・脛は、「傳閻立本本」では青色に黄色い筋の入ったもので、「北宋本」では首元は白、腕と脛は茶褐色の布で覆われているようにみえるが、「南唐本」では刺青のようにもみえる。頭部は頭巾（「北宋本」「傳閻立本本」ともに白。ただし「傳閻立本本」には青と黄の縁取りがある）で覆う。

「職貢圖」には、虜國使者圖や高句麗使者圖、滑國使者圖のように、リアリティを追究した痕跡のある使者圖が存在する。その一方で、中天竺や北天竺といった、梁との交渉が稀薄な國の使者圖には、佛典や佛教に關聯する造形作品などからくるイメージが投影されたと推定できる。[96]とすれば、梁への朝貢の記錄が殘されない倭國の使者圖もまた、先行研究で論じられてきたように、實

圖９　倭國使者圖　傳閻立本本（左）南唐本（中央）北宋本（右）

際の倭國人を描いたというよりは、倭國人の服飾に關わる文獻に基づいて描かれたと結論附けてよかろう。[97]

ところで、題記に記された諸國の服飾と使者圖とが相關關係にあることは、これまでもしばしば指摘されてきた。[98] 使者がその國の出身である限り、これは何ら不思議なことではない。使者が派遣主體となった國の出身ではなかったとしても、派遣國の代表として入朝するからには、入朝時に派遣國の服飾を用いる、乃至、梁がそのように求めることもあったであろう。天竺や倭國のように、諸國の服飾に關するイメージ・史書中の情報が使者圖に採用された事例もある。しかし使者圖には、明らかに遣使國の習俗には屬さない服裝で描かれたものがある。

師子國使者圖

師子國（スリランカ）の題記は、「跋傳欽甫所藏職貢圖」に部分的に殘されるのみで、衣服に關する記載はない。[99]「傳閻立本本」「南唐本」の師子國使者圖は、チュニック型カフタンとズボン、長靴を着用する。「傳閻立本本」では、白いチュニック型カフタンに青色で山々の聯なりと、赤褐色で馬のような動物・それを追う人物（裸身か）が描かれる。「南唐本」では山並みのみが描かれる。類似する文様は未だ見出せておらず、先にあげた諸國のカフタンとはかなり趣を異にしている。襟・袖口・裾には緣取りがあり、襟元からは細長い布が垂れる。

膝下に至るチュニック型カフタン・ズボン・長靴は、師子國の氣候には適さない。師子國の氣候は佛典や入竺僧の記錄などを通じて貴族層にも知られたに違いない。[100] とすれば師子國使者圖は、

圖 10　師子國使者圖　傳閻立本本（左）南唐本（右）

（1）陸路から南朝に至った師子國の使者を路上の旅装で描くか、（2）使者となった師子國以外の人物（服装から判断すれば西アジア・中央アジアの人物）を描くのであろう。判断材料となる史料はなく、いずれとも決し難いが、師子國の使者が陸路から南朝に到る必然性は低い。[101] 西アジア・中央アジアの商人が師子國を中継地として海路より南朝と交易をおこなっているという認識が作成者にはあり、[102] それを念頭に使者圖は描かれた可能性を指摘しておく。

二　作成者の意圖

中天竺・北天竺の使者や倭國の使者など、梁との直接交渉がない、あるいは少なくとも交渉が稀薄であった國の使者圖については、他の使者圖よりも強いイメージ化が施されたであろう。反對に、梁との交流が盛んな國や中國國内諸蕃の使者圖には、一定の寫實性が求められたと豫想される。とはいえ、程度の差はあれ、多くの使者圖はイメージ化と無縁ではなかったと思われる。

第一章第二節では獻上品を奉げ持つ使者圖（于闐國使者圖・周古柯國使者圖・胡蜜丹國使者圖）を取り上げた。西アジア・中央アジア諸國の使者圖は、よく似た衣服を身に着けるものが多い。幅廣の畫面に複數の使者を竝べるという「職貢圖」の構圖においては、見る者が使者圖を見分けるための工夫は不可缺である。右の使者圖の場合には、朝貢品を捧げ持つ姿を描くことで書き分けがなされたのであろう。

書き分けを意圖する工夫は使者圖の隨處に存在する。使者の持ち物は「南唐本」によく殘る。[103] そのうち、立襟で膝下に至るカフタンを身に着ける渴盤陀使者圖（まっすぐな棒を兩手で持つ）・武興使者圖（前方にしなる棒を兩手で持つ）・鄧至國使者圖（右腰に丸い籠を下げ、體の右前でまっすぐな棒を持つ）、膝までのスカート、乃至ズボンを身に着ける臨江蠻使者圖（四川省忠縣。左右が内側に反り返る紙狀の物を兩手で胸の前に持つようにみえる）[104]・天門蠻使者圖（湖南省石門縣。胸まで擧げた兩手に、繩狀の物を幾重にも卷きつける）・建平蠻使者圖（四川省巫山縣。篠のような物を右手に持つ）がそれぞれ異なる持ち物を持たさ

れているのも、第一には書き分けを意圖としたものであろう。

ここで、「職貢圖」が武帝の在位四〇年を祝うために作成されたことを想起したい。「職貢圖」は、武帝の視線を強く意識して作成されたに違いない。また、「職貢圖」は在位四〇年の祝賀にあわせて獻上されたはずであり、その祝いの場において、武帝と參列した皇族・貴族たちが共にこれを見たことも豫想される。このように考えてくると、先述したイメージ化には、より重要な意味を認めることができるのではなかろうか。

前節で紹介したように、堀内氏は、虜國使者圖が天平四年に派遣された東魏の使者を描くことを明らかにした。慧眼であるが、虜國使者圖にもイメージ化は皆無ではない。諸國が複數人で構成される使節を梁に派遣することは東魏以外にもあった。にもかかわらず、虜國使者圖のみが複數で、しかも中心となる人物の左右にやや小さい人物を配する構圖で描かれたのは、[105] 使者の實際を反映するのみならず、虜國の重要性が他を凌ぐことを明示――それはまた、朝貢を受けた武帝の德を强調することにもなる――するためでもあっただろう。

堀内氏によれば、虜國使者圖中で白色の衣服を身に着ける人物は、儒學の才が買われて使者となり、梁武帝やその側近と議論を交わした李鄴に比定できる。李鄴が儒者としての衣服で入朝したかはなお考察の餘地があろうが、虜國使者圖を見た武帝やその周邊の人々は、李鄴の姿から、武帝と李鄴との論議を思い起こしたであろう。

また、于闐國使者圖のように朝貢品を捧げる使者圖は、往年に受けた朝貢を武帝らに想起させたであろう。前章で取り上げた、佛敎に關わる造形作品を聯想させる天竺使者圖には、釋迦誕生の地である天竺から朝貢を受けた武帝の、佛敎世界における尊貴性を高める效果もあったように思う。

さらに、中國國內の異民族勢力である武興蕃・臨江蠻・天門蠻・建平蠻（「傳閻立本本」では「建平蜑」）の使者圖が、「南唐本」で篠や棒・繩・紙狀の物を持つことに注目したい。「南唐本」の國名比定には誤りがあるのみならず、殘された史料は斷片的で、轉寫の過程で簡略化された可能性もあるこれらの品々が何を意味するのか、現時點では特定できていない。

しかし、西域諸國の使者圖に描かれた、西域由來の豪奢な獻上品とは異なり、これらが蕃・蠻であることを強調するメタファーであったことは想定されてよかろう。王素氏によれば、天門蠻・建平蠻・臨江蠻といった荊州近邊の諸蠻の使者圖が描かれたのは、荊州刺史蕭繹による統治の下、武帝の德が彼らにも浸透したことを顯示するためであるという。[106] 蠻であることを強調された使者圖は、武帝の德が梁國內の諸蠻にも遍く及んでおり、その一端を蕭繹が擔っていると主張するものだったのではあるまいか。

葛兆光が論じるように、朝貢が中華思想という獨善的なイメージに基づいて諸國の使者を理解するものである限り、使者圖がイメージ化と無緣であったはずはない。[107] 全ての使者圖にイメージ化の有無を分析することは筆者の能力を大きく超えるが、しかしここまで述べてきたことを考慮するに、使者圖には可能・必要な限り寫實性が追究される一方で、見る者の視線を意識しながら樣々にイメージ化が施されていたと推測できる。

以上の推定が成り立つとすれば、「職貢圖」の使者圖には、現時點で、以下の四種が認められるように思う。

① 遣使國の出身であり、その國で一般に用いられる服飾で入朝した使者を描く。

② 遣使國の出身ではないが、その國で一般に用いられる服飾で入朝した、乃至、そのような服飾で入朝するよう求められた使者を描く。

③ 遣使國の出身ではない使者を、遣使國の服飾をあてはめることなく、入朝した折の姿で描く。

④ 文獻・造形作品・傳聞・使者以外の本國人などから得た情報・イメージに基づき、作成者や見る者にとってあるべき姿をした使者を描く。

イメージ化の度合いは④が最も強いが、①～③の場合にも、特徵的・象徵的な服飾や獻上品、その集團の性格を示すようなアイテムが書き加えられることはあっただろう。

題記に記された諸國の朝貢は、武帝の治世初期からその終盤期に及ぶ。「職貢圖」を前にした武帝は、隨處にちりばめ

られた工夫にもよりながら、周圍の人々とともに四〇年に及ぶ治世を回想したであろう。また、様々なイメージ化により武帝の德を强調・稱贊するという「職貢圖」の意圖は、それを見る者にも理解できたに違いない。

以上を踏まえ、最後に「職貢圖」の「天下」に言及しておく。[108]『藝文類聚』卷第五五雜文部一集序に收められる「職貢圖」序文の冒頭には、

竊に聞きますに、職方氏は、天下の圖を掌り、四夷八蠻、七閩九貉は、その（朝貢の）由來する所は久しいといいます。漢氏以來、南羌は從わず、西域は勢を盛んにして（漢に）迫りました。（そこで漢は）金城郡を置き、玉門關を開き、夜郎を滅ぼし、（匈奴の）日逐王を討ったのです。（さらに）犀〔甲〕をみれば則ち朱崖郡を建て、葡萄を聞けば則ち大宛にまで通じました。（武帝が）德を以て遠（夷）を懷かせたのは、どうしてこれに異なるでしょうか。皇帝は、天下に君臨すること四〇年、禮を示して兆民を利し、朝廷にあって萬國に（德を）彰わしたので、（蕃夷は）山を越えて海を渡り、（梁に至って）交臂して膝を屈し、（あるいは）雲を占い日を望み、譯を重ねて至ったのです。[109]

とある。序文は、職方氏の職掌とする「天下の圖」から始めて、武帝の「天下」に言及する。渡邊信一郎氏が整理したように、職方氏の掌る「天下の圖」には、中國のみならず周圍の夷狄が含まれる。[110]とすれば「職貢圖」は、中華と周圍の夷狄により構成される「天下」を念頭に描かれたのであろう。

しかし「職貢圖」には、各地より至る諸國・諸蕃の使者が描かれる一方で、武帝を含め、「天下」の中心たる梁の人々は描かれない。見る側である武帝やその周邊の人々と、見られる側の諸國・諸蕃とは、畫面の內外で明確に分たれている。こういった關係は、使者圖に施された種々のイメージ化とともに、中華―中華を慕う諸國・諸蕃という關係を强く意識させるものである。そして、中華とそれ以外が隔絕した關係に置かれるが故に、見る側にある武帝とその周邊――そこには蕭繹も含まれる――は、見るという行爲を通じて中華としての視線を共有したはずである。[111]右の見解が成り立つとすれば、「職貢圖」とは、中華の支配者である武帝を中心に、梁を中華として改めて結集するものであったといえよう。

おわりに

本稿の内容を簡單にまとめておく。

第一章では題記の分析を進めた。第一節では、「北宋本」題記・「題記佚文」に殘る使者の人名から、西アジア・中央アジア諸國から梁に至った使者にはソグド人が含まれていたこと、特に滑國からはソグド人やバクトリア人とみられる人物が使者として入朝していたことを指摘した。第二節では、于闐・周古柯國・胡蜜丹國の使者圖の持ち物に注目し、これらは題記のいう諸國の獻上品を描いていると明らかにした。

第二章では使者圖の再檢討を行った。第一節では、「職貢圖」には、リアリティを追究した使者圖と共に、イメージに基づく、作成者・見る者にとってのあるべき姿が描かれた使者圖が存在すると論じた。第二節では、リアリティを重視したと推定される使者圖を含め、武帝の治世を回想し、その德を强調・稱贊するための部分的なイメージ化は隨處に存在すると述べた。

「職貢圖」は、中華と夷狄からなる「天下」を念頭に描かれた。しかし、中華たる梁の人々は「職貢圖」に描かれない。見る者と見られる者、すなわち中華とそれ以外とは、畫面の內外に明確に分たれている。そして、中華―夷狄が隔絕した關係に置かれるが故に、武帝とその周邊は、「職貢圖」を見ることで中華としての意識・視線を共有したであろう。とすれば、「職貢圖」とは、北魏が東西に分裂して北方からの軍事的壓力が低下する中、四〇年に及ぶ武帝の治世の下で最盛期を迎えた梁を、改めて中華として結集するものであったといえる。

以上本稿は、最近の研究動向を踏まえ、「職貢圖」から新たな情報を引き出すことに努めてきた。とはいえ、殘された檢討課題も多い。

梁代に用いられた「天下」の語は、基本的には梁の直接支配が及ぶ領域を指した。例えば、天監一七年（五一八）の詔

は、同年正月一日以前に「他境」に流出した「天下」の民に歸還を呼び掛ける。この詔で、「天下」が梁の直接支配が行われる地域を指すことは疑いない。[112]

今後は、南朝史料に登場する「天下」を網羅的に調査し、「職貢圖」の「天下」觀がもつ意義を分析すべきであろう。その上で、後代に描かれた諸蕃入朝圖や夷狄圖と比較することで、「職貢圖」の特徴を追究する必要もあろう。

註

（1）金維諾「『職貢圖』的時代與作者」（『中國美術史論集』所收、黑龍江美術出版社、二〇〇三年、初出一九六〇年）。「北宋本」は、清代にこれを鑑賞した吳升によれば、「絹本、高八寸、長一丈二尺二寸、大設色、人物高可六寸、繪入朝番客凡二十六國」であった（『大觀錄』卷一一）。現在「北宋本」に殘る使者圖は一二國、題記は一三國。滿洲國滅亡後、民間に流出し、南京博物院に收藏された時にはその半ばが失われていた（徐邦達『古書畫僞訛考辨　上』江蘇古籍出版社、一九八四年、三六～四一頁）。

（2）榎一雄「梁職貢圖について」（初出一九六三年）、「『梁職貢圖について』の補記」（一九六四年）、「滑國に關する梁職貢圖の記事について」（一九六四年）、「梁職貢圖の流傳について」（一九六九年）、「梁職貢圖に關する攻媿集の記事について」（一九七〇年）、「描かれた倭人の使節――北京博物館藏『職貢圖卷』――」（一九八五年）、「職貢圖の起源」（一九八七年）など。全て『榎一雄著作集　7　中國史』（汲古書院、一九九四年）所收。

（3）この間の研究史は、鈴木靖民・金子修一編『梁職貢圖と東部ユーラシア世界』（勉誠出版、二〇一四年）所收の論文を參照されたい。

（4）深津行德「臺灣故宮博物院所藏『梁職貢圖』摹本について」（『調査研究報告』四四、一九九九年）。「南唐本」は『石渠寶笈續編』一七、養心殿藏に「本幅素牋本、縱八寸四分、横一丈六尺八寸、白描畫各國人物、衣飾各異」とあり、「傳閻立本本」は『石渠寶笈』卷五、貯御書房、列朝人書畫目錄、畫卷上に「素絹本、着色畫。（中略）卷高八寸七分、廣七尺四寸」とある。

（5）深津註（4）論文、五一～七〇頁、同「臺灣故宮博物院所藏『南唐顧德謙摹梁元帝蕃客入朝圖』について」（註（3）書所收）二四八～二四九頁。

（6）深津註（4）論文、五五～五六頁。

（7）拙稿「梁職貢圖と東南アジア國書」（註（3）書所收）。

（8）趙燦鵬「南朝梁元帝《職貢圖》題記佚文的新發見」（『文史』二〇一一年第一輯）。

(9)「清張庚諸番職貢圖卷（紙本。高九寸三分、長一丈四尺三寸四分。白描法鈎而不染。一國畫一人、人約六七寸長。毎人各載一記。統計一十八種）」。（　）内は雙行注。

(10) 以下、本文に掲載する「職貢圖」使者圖は、全て深津註(4)論文から引用した。

(11)「天監五年、國王象舒彭、遣厲僧崇［獻］黄耆四百斤・馬四疋」。「北宋本」題記の釋文は榎註(2)著所收のカラー圖版より作成した。［獻］の旁は、カラー圖版では「犮」。カラー圖版下の翻刻に示される推定に從った。題記では北宋皇帝の諱に缺筆があるが、以下では特に注記しない。

(12)「天監十五年、國王姓厭帶、名夷栗陁、始使蒲多達□、［獻］［延］賓□姪名繩杯」。［獻］［延］は殘劃のみ。榎氏註(2)著所收、カラー圖版下の翻刻に示される推定に從った。

(13)「普通元年、又遣冨何了了、獻黄師子・白貂裘・波斯［獅］子錦。王妻□□亦遣使康符真、同貢物」。［獅］は殘劃と「題記佚文」より補う。

(14)「與旁國通、則使旁國胡爲胡書」。

(15) 桑山正進『カーピシー＝ガンダーラ史研究』（京都大學人文化學研究所、一九九〇年）一三一～一四〇頁。

(16) 吉田豐「ソグド語資料から見たソグド人の活動」（『岩波講座世界歴史11　中央ユーラシアの統合』所收、岩波書店、一九九七年）二三八～二四三頁、同「出土資料が語る宗教文化――イラン語圏の佛教を中心に――」（『新アジア佛教史05中央アジア　文明・文化の交差點』所收、佼成出版社、二〇一〇年）一七五～一七七頁、同「ソグド人とソグドの歴史」（曾布川寛・吉田豐編『ソグド人の美術と言語』所收、臨川書店、二〇一一年）四二～四七頁など。

(17) 石松日奈子「敦煌莫高窟第二八五窟北壁の供養者像と供養者題記」（『龍谷史壇』一三一、二〇一〇年）五四頁。

(18) 福島惠「罽賓李氏一族攷――シルクロードのバクトリア商人――」（『史學雜誌』一一九―二、二〇一〇年）。

(19) バクトリア商人はソグド人と交易において競合・協力しながら唐代まで交易を繼續した（吉田註(16)「ソグド人とソグドの歴史」五一～五二頁、福島註(18)論文、四八～五〇頁）。

(20) 桑原隲藏「隋唐時代に支那に來住した西域人に就いて」（『桑原隲藏全集　二』所收、岩波書店、一九六八年、初出一九二六年）三二五頁、齊藤達也「北朝・隋唐史料に見えるソグド姓の成立について」（『史學雜誌』一八八―一二、二〇〇九年）五〇頁。

(21) 余太山「《梁書・西北諸戎傳》與《梁職貢圖》――兼說今存《梁職貢圖》殘卷與裴子野《方國使圖》的關係――」（『兩漢魏晉南北朝正史西域傳研究』所收、中華書局、二〇〇三年、初出一九九八年）五二頁。

(22)「普通二年、遣使康石憶丘波郃、奉表入朝」。榎氏は、「郃」は「那」の誤りであろうと推定する。

(23)「普通三年、［白］題道釋氊獨活使安遠隣伽、到京師貢［獻］」。［白］は、榎氏註(2)著所收カラー圖版下に載る氏の推定に從う。譯中の（　）は筆者が補ったもの。以下も

同じ。「獻」の旁は、カラー圖版では「犬」とある。榎氏の推定に從って改めた（註(11)參照）。

(24) 「大通二年、遣中［使］安馹越、奉表獻佛牙」。［使］は「北宋本」では［至］。榎氏が文脈により［使］と改めたのに從う（註(2)「描かれた倭人の使節」一七〇頁）。

(25) 「大同元年、遣使史蕃匿、奉表貢獻」。

(26) 蕭子顯撰「御講金字摩訶般若波羅蜜經序」『廣弘明集』『大正新修大藏經』（以下『大正』）卷五二、二三七頁ａ一二～一三。

(27) 註(7)拙稿。

(28) 桑原註(20)論文、三一五頁、後藤勝「西域胡安氏の活動と漢化過程」（『會報』七、一九六八年）、Harmatta, János. "Trano-Turcica." *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 25 (1972) : 273、後藤勝「ソグド系歸化人安吐根について――西域歸化人研究　その3――」（『聖德學園岐阜教育大學紀要』一六、一九八八年）。

(29) 森安孝夫『シルクロードと唐帝國』（講談社、二〇〇七年）一二二～一二三頁。

(30) 內藤みどり「東ローマと突厥との交渉に關する史料――Menandri Protectoris Fragmenta 譯註――」（『西突厥史の研究』所收、早稻田大學出版部、一九八八年、初出一九六三年）。

(31) 太原市文物考古研究所編『隋代虞弘墓』（文物出版社、二〇〇五年）、ソグド人墓誌研究ゼミナール「ソグド人漢文墓誌譯注(8)太原出土「虞弘墓誌」（隋・開皇十二年）」（『史滴』三三、二〇一一年）。

(32) 荒川正晴「オアシス國家・遊牧國家とソグド人」（『ユーラシアの交通・交易と唐帝國』所收、名古屋大學出版會、二〇一〇年、初出二〇〇七・二〇〇八年）、同「トルファンにおけるソグド人」（『ソグド人と東ユーラシアの文化交涉』所收、勉誠出版、二〇一四年）一〇六～一〇八頁。

(33) 榮新江氏によれば、五世紀中葉以來、ササン朝――中國間の陸上交易は、ソグド人に掌握されていた（「波斯與中國―兩種文化在唐朝的交融――」『中國學術』二〇〇四年第四期、六三頁）。

(34) ソグド姓（昭武九姓）についてはYoshida, Yutaka. "On the Origin of the Sogdian Surname Zhaowu 昭武 and Related Problems." *Journal Asiatique* 291 (2003)、齊藤註(20)論文、同「中國におけるソグド姓の歷史」（註(32)『ソグド人と東ユーラシアの文化交涉』所收）を參照。

(35) 錢伯泉氏は、龜茲國使・白題國使・末國王が康姓・安姓をもつことから彼らをソグド人であろうとし（「《職貢圖》與南北朝時期的西域」『新疆社會科學』一九八八年第三期）、陳蓮慶氏もまた、滑國王妃使・龜茲國使・波斯國使・白題國使・末國王について、康國・安國における「商胡」の政治的身分を反映するもので、彼らは「外交使節」の身分を持ちながら「國際貿易」に從事したのであろうとする（陳連慶「輯本梁元帝《職貢圖》序」（『古籍整理研究學刊』一九八七年第三期、四頁）。右のうち末國王が安姓を持つことについては、齊藤達也氏のいうように、末國がメルヴに

あったことから、「職貢圖」の編者が末國をかつての「安息國」と結びつけたためと解するのが妥當である（齊藤達也「安息國・安國とソグド人」『國際佛教學大學院大學研究紀要』一一、二〇〇七年、九頁）。題記が末國國王の名を末楽盤とするのは、末國がササン朝ペルシャの Marzban（邊境侯）＝末楽盤に支配されるという使者の情報を、梁の官人が誤解したことによると推定できるからである（吉田豊氏のご教示による）。

(36) 桑原註(20)論文、三三五頁。

(37) 吉田註(16)「ソグド人とソグドの歴史」、二四～二五頁。

(38) 桑山註(15)著、一四二～一四四頁。

(39) 例えば突厥支配下にあったソグド人は、交易の機會を求めて西突厥可汗に東ローマへの使者の派遣を要請し、使者に起用されていた（内藤註(30)論文）。

(40) 「大同元年、遣使符道安・楊瑍等、送啓乞歸其國」。

(41) 『梁書』巻五四、諸夷傳、武興國條。

(42) 前掲『梁書』も、諸本に「符氏」とあるのを『南史』により「苻氏」と改める。また『南齊書』巻五九、氐は、「苻幼孫」と「符幼孫」を混用する。

(43) 同右。

(44) 武興（仇池）と南北朝の交渉は、李祖桓『仇池國志』（書目文獻出版社、一九八六年）に詳しい。

(45) 北朝が梁に派遣した使者もまた、佛教についての知識が求められていた（堀内淳一「南北朝間の使節よりみた『文化』の多様性」『六朝學術學會報』六、二〇〇五年、四〇頁）。

(46) 榎註(2)「滑國に關する梁職貢圖の記事について」一五六頁。

(47) 本國人の服飾について「北宋本」題記には、「着小袖長身袍、金玉爲［絡帶］」とある。「絡帶」は殘劃のみ。榎氏註(2)著所收カラー圖版下に載る氏の推定に從う。

(48) 「其使人、奉頭剪髮、着波斯錦褶・黄錦袴・朱麋皮長壅韡」。

(49) 「北宋本」滑國使者圖は胡人にも似ない。これは、滑國使者圖は使者として至った胡人を描く、という假說とは矛盾する。ここで注目したいのが、「北宋本」白題國使者圖の容貌がモンゴロイドに近く、しかし「傳閻立本本」白題國使者圖は、ポーズ・衣服は「北宋本」と一致するものの、金髮で深目高鼻という胡人を描くことである。本文では白題國の使者をソグド人と假定した。この假定の是非はおくとしても、バルフがモンゴロイドを使者に起用する必然性はない。「北宋本」に至る摹寫の過程で使者圖の容貌が崩れ、兩本に差異が生じたと考えておく。右の事例を敷衍すれば、滑國使者圖も、本來は胡人の容貌を持つ人物として描かれた可能性はある。

(50) 「表曰、『一切所恭敬、一切吉具足、如天靜無雲、滿月明曜、天子身清靜、具足亦如此。爲四海弘願、以爲舟航。揚州閻浮提第一廣大國、人［民］布滿、歡樂疌嚴、如天上不異。周古柯王頂禮弁拜、問訊天子［念］。我］今上金［椀］一・琉璃椀一・馬一疋』」。表文は「題記佚文」にも

引かれるが、脱字と思われる箇所が多く、「北宋本」題記より翻刻した。後掲する呵跋檀國・胡蜜丹國の書・表も「北宋本」による。榎氏は註(2)著所收カラー圖版下の翻刻で「問訊天子」の下、「今上」の上に二字ありとする。「題記佚文」は該當部分を「念我」とするが、寫眞版の該當部分には三文字分のスペースが認められる。殘劃から第一字を「念」、第三字を「我」とした。「民」「椀」は「北宋本」では破損。「題記佚文」により補った。

(51) 「梁天監元年、遣使朝貢、獻瑪瑙鍾」。「跋傅欽甫所藏職貢圖」は『攻媿集』(四庫全書本)を用いた。

(52) 呵跋檀國の書のように、複數回の挨拶を記すことは、古代オリエントの書狀に多くみられるという。近くは五二〇年にササン朝のカワードから北魏に送られた書狀や(Sims-Williams, Nicolas. "From Babylon to China: Astrological and Epistolary Formulae across Two Millennia." *La Persia e l'Asia centrale da Alessandro al X secolo. Rome: Accademia Nazionale dei Lincei*, 1996)、下ってはベゼクリク出土マニ教徒によるソグド語の書狀にも確認できる(吉田豐・森安孝夫「ベゼクリク出土ソグド語・ウイグル語マニ教徒手紙文」『內陸アジア言語の研究』一五、二〇〇〇年、吉田執筆部分、一六四～一六五頁)。

(53) 「其曰、『最所［應］恭敬吉天子、東方大地呵跋檀王問訊［非］一過、乃百千［萬］億、天子安［穩］。我今遣使手送此書。書不空故、上馬一疋・銀器一故』」。榎氏は註(2)著所收カラー圖版下の翻刻で「應」を「寔」、「非」を「兆」としたが、「題記佚文」に「應」「非」とあり殘劃も「應」「非」を支持する。「萬」は「北宋本」では破損。「題記佚文」により補った。「穩」は「北宋本」では「隱」。榎氏の意改に從う(同右)。「題記佚文」も「穩」。

(54) 「其表曰、『［揚］州天子、［日］出處大國聖主、胡［蜜］王名［時］僕、遥長跪合掌、作禮千万。今滑使到聖國、用附函啓并水精鍾一口・馬一疋。聖主有若所勑、不敢有異』」。［揚］は「北宋本」では「楊」。榎氏は「揚」と推定し、「題記佚文」にも「揚」とある。「日」は「北宋本」では脱字、「時」は「北宋本」では破損している。いずれも「題記佚文」により補った。［蜜］は「宀」を缺く。榎氏の校訂に從った。

(55) 西嶋定生「倭國使圖について」(『西嶋定生東アジア史論集　四　東アジア世界と日本』所收、岩波書店、二〇〇二年、初出一九六四年)、上田正昭「職貢圖の倭國使について」「中國史籍における倭人風俗」(『日本古代國家論究』所收、塙書房、一九六八年、初出は一九六四年・一九六六年)。

(56) 榎一雄『邪馬臺國』(至文堂、一九六六年)二〇九～二一四頁、武田佐知子「推古朝以前の衣服形態――埴輪男子像の衣服の理解へむけて――」(『古代國家の形成と衣服制――袴と貫頭衣――』所收、吉川弘文館、一九八四年、初出一九八二年)一一七～一一八頁、同『衣服で讀み直す日本史――男裝と王權――』(朝日新聞社、一九九八年)二一～二二頁。

(57) 坂元義種「五王の世紀――とくに倭國王の南朝外交の終焉を中心に――」(上田正昭編『日本史(1)』所收、有斐閣、一九七七年) 一〇一～一〇三頁。

(58) 深津註(4)論文、六二～六六頁。

(59) 「職貢圖」の配列順序は、中村和樹「『梁職貢圖』の國名記載順」(註(3)書所收) が詳しく考察する。

(60) 『魏書』卷一二、孝靜帝紀、天平四年秋七月甲辰條。

(61) 『魏書』卷八四、李業興傳。

(62) 堀內淳一「『魯國』か『虜國』か」(註(3)書所收) 四八八～四九七頁。虜國使の題記の一部が趙燦鵬氏により『大唐內典錄』卷四に見出されたが (「南朝梁元帝《職貢圖》題記佚文續拾」(『文史』二〇一一年第四輯)、國人の服飾に關する記載はない。

(63) 「婦人衣白、而男子衣結錦、飾以金銀。貴者冠幘而無[後]、以金銀為鹿耳・羽、加之幘上。賤者冠折風、其形如古之弁。穿耳以金環。上衣曰表、下衣曰長袴。腰有銀帶」。「題記佚文」は「後」を「復」とするが、『通典』卷一八六、邊防二、高句麗に「如冠幘而無後」とあり、後掲の『翰苑』も「後」とすることから「後」をとった。『通典』は上海人民出版社の影印本を使用。

(64) 湯淺幸孫『翰苑校釋』(國書刊行會、一九八三年) 九一頁。史料は以下のとおり。「婦人衣白、而男子衣［紅］錦、飾以金銀。貴者冠幘、而後以金銀爲鹿茸、加之幘上。賤者冠折風、穿耳以金環。上衣白衫、下曰長袴。腰有銀帶、左佩礪、而右佩五子刀、足履豆禮鞜」(同右、九〇頁)。［紅］は原鈔本では「結」とあるが、湯淺氏は意を以て「紅」と改める。

(65) 「其民亦造錦、紫地襭文者爲上」。史料は註(64)『翰苑校釋』、九〇頁。

(66) 穴澤咏光・馬目順一「アフラシャブ都城址出土の壁畫にみられる朝鮮人使節について」(『朝鮮學報』八〇、一九七六年) 二二～二六頁、李成市「法隆寺金堂阿彌陀如來座像臺座から發見された人物畫像の出自をめぐって」(長澤和俊［代表］『アジアにおける國際交流と地域文化』所收、平成四・五年度科學研究費補助金 (總合研究A) 研究成果報告書、一九九四年)。

(67) 李成市「『梁職貢圖』の高句麗使圖について」(福井重雅［代表］『東アジア史上の國際關係と文化交流』所收、昭和六一・六二年度文部省科學研究費補助金 (總合研究A) 研究成果報告書、一九八七年) 一九～二〇頁、노태돈『예빈도에 보인 고구려――당 이현묘 예빈도의 조우관을 쓴 사절에 대하여――』(ソウル大學校出版部、二〇〇三年) 三一頁。

(68) Il'yasov, Jangar Ya. "The Hephthalite Terracotta." *Silk Road Art and Archaeology : Journal of the Institute of Silk Road Studies.* 7 (2001) : 190–191. Alram, Michael. "A Rare Hunnish Coin Type" *Silk Road Art and Archaeology : Journal of the Institute of Silk Road Studies.* 8 (2002)、影山悅子「中國新出ソグド人葬具に見られる鳥翼冠と三面三日月冠――エフタルの中央アジア支配の影響――」(『オ

リエント』五〇―二、二〇〇七年）など。

(69) ササン朝や周邊地域の織物については、Ackerman, Phyllis. “Textiles through the Sāsānian Period.” *A Survey of Persian Art from Prehistoric Times to the Present.* ed. by Arthur Upham Pope and Phyllis Ackerman. Tehran : Soroush Press, 1938. Fukai, Shinji, et al. *Taq-I Busutan.* IV Tokyo : The Institute of Oriental Culture, The University of Tokyo, 1984. 96–132. Martiniani-Reber, Marielle. *Soieries sassanides, coptes et byzantines : Ⅴe–XIe siècles.* Paris : Ministère de la Culture et de la Communication, 1986. Bromberg, Carol Altman. “Sasanian Royal Emblems in the Northern Caucasus.” *Old and Middle Iranian Studies.* ed. by Gherardo Gnoli and Antonio Panaino. Roma : Istituto italiano per il Medio ed Estremo Oriente, 1990. 長澤和俊・横張和子『絹の道　シルクロード染織史』（講談社、二〇〇一年）、影山悅子「ソグディアナにおける絹織物の使用と生産」（『オリエント』四五―一、二〇〇二年）などを參照した。

(70) 影山氏によれば、六世紀から七世紀のソグディアナでは細かい柄の錦が使用されていた（註(69)論文、四四頁）。また横張氏によれば、エジプトのアンティノティエで出土したペルシャ錦からみて、五世紀から六世紀、ペルシャ錦では嚴格に對稱的な人面文や動物の胸像が主流で、かつてはペルシャ錦の指標とされた聯珠圓文意匠は稀であるという（註(69)前掲書、一四三頁）。

(71) 註(57)參照。

(72) 榎註(2)「梁職貢圖について」一二二頁。

(73) 五天竺については、船山徹「インド中國における佛教文獻の傳播と佛教徒の地理的移動に關する基礎知識」（同［代表］『中國印度宗教史とくに佛教史における書物の流通傳播と人物移動の地域特性』平成19年度～平成22年度科學研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書、二〇一一年）六～一二頁。

(74) 佐藤圭四郎『世界の歴史6　古代インド』（河出書房、一九六八年）三四〇頁。

(75) 『梁書』卷五四、諸夷傳、中天竺條。

(76) 馮承鈞『中國南洋交通史』（上海古籍出版社、二〇〇五年、初版一九三六年）一八八頁。

(77) この時期のグプタ朝については、Maity, Sachindra Kumar. *The Imperial Guptas and Their Times.* New Delhi : Munshiram Manoharlal Publishers, 1975. Agrawal, Ashvini. *Rise and Fall of the Imperial Guptas.* Delhi : Motilal Banarsidass Publishers, 1989 等を參照した。

(78) 拙稿「中國南朝の對外關係において佛教が果たした役割について――南海諸國の上表文の檢討を中心に――」（『古代アジア世界の對外交涉と佛教』所收、山川出版社、二〇一一年、初出二〇〇八年）。

(79) 萬佛寺出土の佛像がインド的要素を持つことについては、吐谷渾を經由した影響を想定する說と（山名伸生「吐谷渾と成都の佛像」『佛教藝術』二一八、一九九五年）、建康を

經由した影響を想定する説とがある（吉村怜「成都萬佛寺址出土佛像と建康佛教――梁中大通元年銘のインド式佛像について――」『佛教藝術』二四〇、一九九八年）。

(80) 土居淑子「『歴代名畫記』にあらわれた西域系畫人の畫風について」（『古代中國考古・文化論叢』所收、言叢社、一九九五年、初出一九七一年）三〇〇頁。

(81) 註(73)參照。

(82) 『梁書』卷二、本紀二、天監三年九月壬子條。

(83) 『法顯傳』は長澤和俊『法顯傳　譯注・解説――北宋本・南宋本・高麗大藏經本・石山寺本四種影印とその比較研究――』（雄山閣、一九九六年）を用いた。史料は、四五・二九七～二九八頁。

(84) 田邊勝美「ウズベキスタン南部出土の佛陀像とクシャン族供養者像――クシャン族佛教徒の『肖像』表現の意義について――」（『國華』一三四九、二〇〇八年）、同「ガンダーラ美術の圖像學的研究(2)　クシャン人在家菩薩像について――聖紐と佛龕を中心に――」（『古代オリエント博物館紀要』二八、二〇〇八年）一一四頁。

(85) 註(83)『法顯傳』、二八～二九・二九三頁。

(86) 桑山氏は北天竺地域の北部、ガンダーラまではエフタルの支配が確立されていたとするが（桑山註(15)著第二章）、フーナとエフタルを同一とする説に從うならば、エフタルはインド中部にまで侵入していたこととなる（余太山『嚈噠史研究』齊魯書社、一九八六年、八五～一〇二頁）。現在では、エフタルとフーナを同一視する見解が優勢である（Grenet, Franz. “Regional Interaction in Central Asia and Northwest India in the Kidarite and Hephthalite Periods.” *Indo-Iranian Languages and Peoples*. ed. by Nicholas Sims-Williams. New York : Oxford UP, 2002, p. 211 など。）

(87) 註(68)參照

(88) 『大唐西域記』卷二『大正』卷五一、八七六頁ｂ一六。中華書局の校注本（二〇〇〇年）では一七六頁。

(89) 『南海寄歸內法傳』卷二『大正』卷五四、二一四頁ｂ一三～一五。中華書局の校注本（二〇〇九年）では九一頁。

(90) 桑山正進編『慧超往五天竺國傳研究』（京都大學人文科學研究所、一九九二年）三三～四一頁。

(91) 註(90)書、一〇〇頁、井狩彌介執筆擔當部分。

(92) トラマーナがエフタルの王であることは、Melzer, Gudrun “A Copper Scroll Inscription from the Time of the Alchon Huns.” *Manuscripts in the Schøyen Collection Buddhist manuscripts* ed. by Jens Erland Braarvig. Oslo : Hermes Publishing, 2006 により最終的に確定されたといえる。

(93) 「以木綿帖首、衣横幅、無縫、但結［束相連］」。「束相連」は「北宋本」では破損。「題記佚文」により補う。

(94) 「男子皆露紒、以木緜招頭。其衣横幅、但結束相連、略無縫」。

(95) ただし、「職貢圖」題記の倭國條の出典は『三國志』倭人條に限られない（河内春人「中國における倭人情報――『梁職貢圖』の前後――」註(3)書所收）。

(96) 石見清裕氏もまた、南朝に朝貢した國々を精査し、前代

までに得た情報を取り入れて作成した使者圖と、實際に梁に到着した使者に基づいて作成した使者圖が共存すると想定する（「梁への道――『職貢圖』とユーラシア交通――」註(3)書所收）。

(97) 『三國志』倭人條に從うと、倭國の位置が本來よりも遙かに南方に比定されることはよく知られている。先述してきたように、「傳閻立本本」が原圖の色彩を部分的にでも留めることは間違いない。「傳閻立本本」倭國使者圖の黑い肌が原圖を踏襲しているとすれば、これもまた書物から得たイメージの投影と解せよう。ちなみに、倭國人の肌が黑いというイメージは、一〇世紀末に成立した *Ḥudūd al-ʿĀlam* の *Wāq-wāq* にも繼承される（森安孝夫「チベット語史料中に現われる北方民族――DRU-GU と HOR――」『アジア・アフリカ言語文化研究』一四、一九七七年、二〇頁）。

(98) 李成市註(66)・(67)論文、連冕「宋摹梁元帝《職貢圖》與中古域外《冠服》」（『裝飾』一八八、二〇〇八年）など。

(99) 「師子國、大通元年、其王迦葉伽羅訶黎邪使使貢獻」。

(100) 例えば『法顯傳』には、「其國和適、無冬夏之異、草木常茂」（註(83)『法顯傳』一〇九・三一九頁）とある。

(101) 舊稿では、師子國の遣使について僞造の可能性が大きいとした（註(78)拙稿）。

(102) 當該時期に、スリランカに寄港したペルシャ船の存在は、コスマスの記述（『キリスト教地誌』）を通じてかねてより知られていた。さらに、アラム系の文字の書かれた銀器とササン朝金貨が廣東省遂溪縣から發見されたことにより、姜伯勤氏は、五世紀、ペルシャ商人（ソグド人も含めて）がスリランカを經由して南朝に至っていたと推定した（「廣州與海上絲綢之路的伊蘭人――論遂溪的考古新發現」『廣州與海上絲綢之路』所收、廣東省社會科學院、一九九一年、二七頁）。吉田豐氏も、銀器の銘文を分析する中で、この種の金銀器が廣東で發見されたことは、當該時期にソグド人が南海貿易にも進出していたことを示唆すると述べる（「ソグド語雜錄（Ⅳ）」『內陸アジア言語の研究』一〇、一九九五年、七九～八三頁）。

(103) ここに列擧した使者圖は、他本では持ち物が描かれない。しかし多くの場合、使者圖は不自然なポーズをとる。幾度かの轉寫を經て持ち物が省略されたためであろう。

(104) ただし、臨江蠻使者圖は女蜑國使者圖の誤りと考えられる（中村註(59)論文、一二二頁）。女蜑國の位置は不詳。

(105) 大きめに描いた人物を中央に、小さめの人物をその後方左右に配する虜國使者圖の構圖について、同時代における類例を北朝で搜索するに、威儀具や後續の人物像がないという點を除けば、五〇〇年頃に北魏で登場した主從形式の供養者像に求めることができよう。これは北魏王族の寄進龕を中心にみられるもので、洛陽の貴族階級が所藏していた畫卷や屏風繪などに影響を受けたものであるという（石松日奈子［代表］『古代中國・中央アジアの佛教供養者像に關する調査研究』平成20年～22年度科學研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書、七六～九九頁）。

(106) 王素「梁職貢圖と西域諸國――新出清張庚摹本『諸番職貢圖卷』がもたらす問題」(註(3)書所收、)五八頁。

(107) 葛兆光「《天下》《中國》與《四夷》――作爲思想史文獻的古代中國的世界地圖」(『學術集林』一六、一九九九年)五〇頁、同「思想史研究視野中的圖像」『中國社會科學』(二〇〇二年第四期)七八～七九頁。

(108) 「職貢圖」の天下觀は、鈴木靖民「東部ユーラシア世界史と東アジア世界史――梁の國際關係・國際秩序・國際意識を中心として――」(註(3)書所收)にも言及される。

(109) 「竊聞、職方氏掌天下之圖、四夷八蠻、七閩九貉、其所由來久矣。漢氏以來、南羌旅距、西域憑陵。創金城、開玉關、絕夜郎、討日逐。覩犀〔甲〕則建朱崖、聞蒲陶則通大宛。以德懷遠、異乎是哉。皇帝君臨天下之四十載、垂衣裳而賴兆民、坐巖廊而彰萬國、梯山航海、交臂屈膝、占雲望日、重譯至焉」。『藝文類聚』は上海古籍出版社校本(一九八二年)を使用した。〔甲〕は、上海古籍出版社の校本では〔申〕。意を以て改めた。

(110) 渡邊信一郎『中國古代の王權と天下秩序――日中比較史の視點から――』(校倉書房、二〇〇三年)八二頁。

(111) 美術史における他者の視點については島本浣・加須屋誠編『美術史と他者』(晃洋書房、二〇〇〇年)の加須屋誠「日本美術史のなかの『他者』、そして/あるいは、『他者』としての日本美術史――病草紙の觀者は誰か?――」、ノーマン・ブライソン「フランスのオリエンタリズム繪畫における『他者』」を參照した。

(112) 「詔曰、『夫樂所自生、含識之常性、厚下安宅、馭世之通規。朕矜此庶氓、無忘待旦、亟弘生聚之略、每布寬卹之恩、而編戶未滋、遷徙尚有。輕去故鄉、豈其本志。資業殆闕、自返莫由、巢南之心、亦何能弭。(中略)凡天下之民、有流移他境、在天監十七年正月一日以前、可開恩半歲、悉聽還本、蠲課三年』」(『梁書』卷二、本紀二、天監一七年正月丁巳條)。

ON THE *PORTRAITS OF PERIODICAL OFFERINGS*（職貢圖）TO THE LIANG DYNASTY AND ITS WORLD VIEW

KAWAKAMI Mayuko

This paper attempts a systematic examination of essential information by which the significance of the entire *Portraits of Periodical Offerings*（*Zhigongtu* 職貢圖）can be explored by re-examining the titles（題記）and the portraits of envoys to Liang China.

The first section of this paper analyzes the titles. The titles of the envoys seen in the manuscript of *Portraits of Periodical Offerings*, held by Nanjing Museum, and those found in the *Airiyinlushuhua xulu*（愛日吟廬書畫續錄）reveal that the emissaries from West and Central Asian kingdoms to the Liang dynasty included Sogdians, specifically, the Hephthalites（滑國）sent Sogdians and Bactrians as their official envoys to the Liang court. Two other manuscripts in the National Palace Museum in Taiwan show the envoy from Khotan（于闐國）carrying a pot-shaped object, which can be regarded as their gift of a glass vase（瑠璃罌）officially presented to the emperor in 519 ; accordingly, the potraits of the envoys from Karghalik（周古柯國）and Wakhan（胡蜜丹國）are also accompanied by their respective gifts to the Liang emperor in 520.

The second section focuses on the drawing itself. Several characteristics in *Portraits of Periodical Offerings* testify to the artist's and viewer's ideas of how the envoys *should* appear as well as the effort to depict them as they really were. Even the realism-oriented drawings contain certain imagery that aims at retrospectively emphasizing and praising the reign of Emperor Wu of the Liang dynasty.

The preface of *Portraits of Periodical Offerings* makes clear that its world is composed of the Chinese Empire and "barbarian" kingdoms. However, none of the Chinese people who received the envoys are drawn in the picture, while those from the periphery of this world are portrayed in detail. There is a clear divide between inside and outside of the picture, between the Chinese viewers and the "barbarians" as the objects of their gaze. This gap allowed Emperor Wu and his subjects to share the same gaze and worldview of the empire in viewing *Portraits of Periodical Offerings*. In this sense, *Portraits of Periodical Offerings* functioned as a focal point by which the Liang dynasty in its prime could confirm its unity, the center of which is occupied by the ruler of all under heaven, Emperor Wu.